

## 優秀賞

【学校運営】

# 不登校課題に対する 「学びの多様化学校」としての役割

大阪府大阪市立心和中学校

もり おか えい いち

盛岡 栄市



中学校・優秀賞

## 1 開校の経過

文部科学省は毎年10月下旬ごろ、「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」を公表する。そのうち、不登校に関わる調査は平成28年度から始まっているが、調査がはじまって以来全国的に不登校の児童生徒数は増え続けている。とりわけ、コロナ禍以降は、増え方の傾きが大きくなってきている。

大阪市における不登校の状況については、小学校は全国平均や大阪府平均とさほど差はなく、むしろ低い結果となっている。しかし、中学生になると急激に増え、政令市の中で最も多いという

年が続いている。すなわち、大阪市の不登校に関する課題として、小学校から中学校に上がる段階で不登校になる生徒が多く、中学校における教育内容や生活指導の在り方、あるいは小中連携の課題などを早急に見直す必要があると思っている。

そのような大阪市の状況に対して、教育委員会は令和2年度に教育支援センター（適応指導教室）を1か所開設した。大阪市における教育支援センターの役割は、自校に通いにくい主に中学生に対して、転校することなく学習の場を自校以外の場所で提供するものである。その教育支援センターを令和3年度には2か所増やし、市内

### 令和5年度 大阪市立学校における暴力行為・いじめ認知・不登校数

令和6年10月31日

#### 1 暴力行為発生件数

年度	小学校						中学校					
	件数			比率1000人当たり			件数			比率1000人当たり		
	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市
令和5年度	70,009	5,854	165	11.5	14.1	1.5	33,617	4,498	403	10.4	20.5	7.9

#### 2 いじめ認知件数

年度	小学校						中学校					
	件数			比率1000人当たり			件数			比率1000人当たり		
	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市
令和5年度	588,930	57,634	21,873	96.5	138.9	193.9	122,703	10,473	1,144	38.1	47.7	22.4

#### 3 不登校数

年度	小学校						中学校					
	人数			在籍比率			人数			在籍比率		
	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市	全国	大阪府	大阪市
令和5年度	130,370	8,188	2,227	2.14	1.97	1.97	216,112	14,818	4,917	6.71	6.76	9.61

※令和5年度の小中学校別「暴力行為発生件数」「いじめ認知件数」「不登校数」については、大阪市として独自調査を実施していますので、実数(大阪市)を公表しています。なお、大阪府の比率については公表されている数値をもとに大阪市独自に計算したものを含みます。なお、小学校には義務教育学校前期課程を、中学校には義務教育学校後期課程を含みます。

大阪市教育委員会発表資料

3か所とした。それまで学校に通えなかった児童生徒が約300人登録して教育支援センターに通い、自学自習を基本としながら学習する場が確保されている。

教育委員会では、4か所目の開設に際して、教育支援センターではなく、学籍を移して中学校生活を送ることのできる「学びの多様化学校」を開校する方針を固め、ワーキンググループを立ち上げて準備を進めた。幾つかの「学びの多様化学校」には先輩校として何度も訪問させていただき、教育内容や環境整備など大いに参考にさせていただいた。

令和5年度には大阪市教育委員会事務局内に開校準備室が設置され、これまでの中学校教育のイメージを一新するような学校の創造をめざして準備を進めた。私は、令和5年度開校準備室の室長として1年間その準備に努め、令和6年4月1日「学びの多様化学校」である大阪市立心南中学校の初代校長として着任し、現在もその任に就いている。

## 2 | 開校当初の思い・方針とその検証に向けて

本校は、大阪市はもとより大阪府においても公立学校初の「学びの多様化学校」である。人権教育を基盤とした大阪市的な「学びの多様化学校」をどのように作り上げていくのか、不登校を経験した生徒にどのように接していくのかは、校長である私をはっきりと示す必要があると考えた。校長が先頭に立って教育の方向性を示すために、自ら積極的に生徒と接し、時には授業をしながら、生徒の実態を的確に把握して教育実践を進めていくことを心がけている。そして、思いの根底に常に「生徒ファースト」の考えを持ち、様々な取組を「やってみてダメだったらやめる」というふうにフレキシブルな学校経営を進めていく考えで、令和6年度1年間取り組んだ。

全国にある「学びの多様化学校」でも、転入の要件、教育のコンセプトや施設の設定・使い

方等は学校によって違っている。それぞれの学校において自治体の状況や開校までのプロセス等を踏まえ教育委員会と学校が話し合い、試行錯誤しながら教育活動を進めている。

本校における教育のコンセプトは生徒の自己選択を基本として取り組むこととした。行動や服装、持ち物もそのほとんどを生徒の自主性に任せている。そのやり方が絶対的に正しいと思っているわけではない。教職員は、指導の在り方に対して日々悩み議論して、その都度方向性を確認しながら教育を進めてきた。しかし、授業の在り方にしても生徒指導にしても、まだまだ模索中だと言える。喧々諤々議論をしても結論がなかなか出ないことも多々あった。よってこれからの中・長期的な展望を定めるためには、令和6年度1年間の取組を振り返り、成果と課題を明らかにすることで「学びの多様化学校」としての実践を検証し、今後の取組につなげたい。



## 3 | 心和中学校昼間部の概要

### (1) 施設・設備

本校は、大阪市のど真ん中ともいえる繁華街ミナミの東の端にあって、廃校になった日東小学校の跡地を活用している。校舎そのものは古いが、いったん中に入るとまったく学校らしくない空間が広がっている。家具メーカーイケア・ジャパン株式会社の協力を得て、多様な生徒一人ひとりがその特性にあった心地の良い居場所を見つけられるように、開校の1年前からイケアの担当者とは何度もWeb会議を重ねながら各部屋の設計を

考案してきた。

ホームルーム教室や談話室、図書室、リラックスルームなど、公立の中学校では見たことのないような教室を数多く整備し、学校らしくない学校が出来上がった。



## (2) 教育システム、教育内容

### ① 夜間部を併設

本校は、不登校を経験した学齢期の生徒が通う「学びの多様化学校」である昼間部と、様々な理由で中学校の教育が十分に受けられなかった学齢期を超えた生徒が通う夜間部の二部制をとっている。昼間部の5時間目と夜間部の1時間目を同一時間帯にし、一緒に学ぶこともある。とりわけ、体育の時間に取り組むピラティスの授業では毎回参加する生徒も多く、ペアで行う活動では、昼間部生徒と夜間部生徒が自然にペアを組むなど積極的に交流する姿が見られる。

### ② 生徒数

令和6年度昼間部生徒数  
(年間受け入れ予定人数70人)

	1年	2年	3年	全校生徒
前期(4月)転入生	—	6人	20人	26人
後期(10月)転入生	9人	24人	7人	40人
全校生徒	9人	30人	27人	66人

### ③ 教育の特徴

- ・ありのままを受け止めるため、校則や標準服・指定かばんなどは設けていない。
- ・学年ごとに教員団を決めているが、生徒一人ひとりの担当教員となるチューターは、生徒自身が選択することを基本として決めている。
- ・5教科の授業は複数の教科担当により習熟度別分割授業やTT(チームティーチング)にて行っている。ただし、授業への出席は自己判断に任せており、出席しない場合は図書室で自習したり、リラックスルームで休憩したりできる。
- ・地域や様々な関連企業・機関の支援を受け、個別のニーズに合わせたキャリア教育を進めている。
- ・スクールカウンセラーが週5日配置され、いつでも相談できる体制が整っている。
- ・ハロウィンパーティーやクリスマス会など毎月1回お誕生日会を兼ねた「お楽しみ会」を設定し、生徒の実行委員会を組織しながら、自主的・主体的に企画・運営ができることをめざしている。
- ・eスポーツやドローンを活用した授業を行い、生徒の興味・関心を高め、主体的に学ぶ姿勢を育成している。

### ④ 校時表

#### 昼間部

学活	13:15~13:25
1限	13:25~14:10
2限	14:20~15:05
長休憩	15:05~15:30
3限	15:30~16:15
4限	16:25~17:10
学活	17:15~17:25
5限	17:30~18:10

夜間部

学活	17:20~17:30
1限	17:30~18:10
2限	18:20~19:00
補食	19:00~19:15
3限	19:15~19:55
4限	20:00~20:40



⑤ 教室名・学年名

本校においては、学年の名称を、思いをこめて以下のようにしている。

1年生： 楽 まずは、学校に来て楽しんでほしい、学校を楽しいと思ってほしい。

2年生： 道 これからの将来に向かって進むべき道、生きていく道を先生方と一緒に探してほしい。

3年生： 夢 自ら決めた進むべき道に夢を持ち、その夢を実現するために努力してほしい。



## 4 | 生徒の状況・様子

### (1) 令和6年度 昼間部の出席状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
On-lineを含む	78.4	67.4	71.5	69.8	74.6	71.3	77.3
On-lineを除く			63.7	60.7	64.4	59.9	63.2

	11月	12月	1月	2月	3月
On-lineを含む	73.0	70.5	67.1	65.4	67.9
On-lineを除く	55.9	56.3	54.6	52.7	61.0

生徒の出席状況は上記のように、対面での登校率はおおむね60%となっている。しかし、傾向としては二極分化しており、毎日のように登校する生徒とあまり登校できていない生徒に分かれている。そのような状況ではあるが、前年度前籍校ではほとんど登校できていなかった生徒が、毎日6割程度対面で登校できているということは成果であり、我々教職員にとって何より嬉しく、働くモチベーションになっている。

### (2) 授業や行事など校内での活動の様子

#### ①授業について

中学校の学習指導要領に定められている年間授業時数は全学年1015時間であるが、本校は教育課程の特例を受けており年間770時間と定めている。したがって、各教科の授業時数は週当たり1時間程度少なくなっている。また、出席率が約7割であるのに加えて、授業への参加が自己選択であるため、年間指導計画を定めていても、なかなかその通り進まないのが現状である。さらに、不登校だった期間の差などから学力差が非常に大きく、授業の在り方や年間指導

計画の立て方についてはまだまだ各教科ともに模索中である。令和6年度当初から総合的な学習の時間を週3時間確保して「学び直し」を進めているが、その時間の活用も含めて今後の在り方を検討しているところである。

#### ②生活指導について

生活指導については、チューターが中心となって進めている。しかし、教員によってはチューターとして生徒5人を担当しており、負担が大きくなっている。その場合、学年団から応援に入り対応しているが、発達特性の強い生徒も多く対応に時間を要したり、指導の方向性がなかなかまとまらなかったりしている。今後は、チューター制度の在り方を再構築し、スクールカウンセラーとの連携を強化しながら、生徒一人ひとりが自尊感情を高められるような指導・支援の在り方を追求していきたい。

#### ③行事について

昼間部が行っている毎月のお楽しみ会などは出席率が高く大いに盛り上がるが、令和6年度1

年間の中で最も盛り上がったのが夜間部と共に取り組んだスポーツフェスタである。縦割りで4組のチームを編成し、最高齢86歳の夜間部生徒もいることから玉入れやビン運びなど軽スポーツ的な競技で競った。選手全員が一生懸命競技に参加し、一生懸命自分のチームを応援して熱気にあふれていた。普段の合同授業の中では「勉強することが楽しくて仕方がない」という夜間部生徒の言葉に、自らの学習に対する姿勢を見直した昼間部生徒がいる。そして、このスポーツフェスタの中でも昼間部の生徒は、夜間部生徒の熱心さ・ひたむきさに何かを感じたことだろう。このような取組ができるのも本校独自の特色である。



### (3) 学校生活アンケートより

12月に実施したアンケート結果(抜粋)は次の通りであった。(回収率は約70%)

肯定的な回答をした生徒の割合

学校に行くのは楽しいですか	65.1 %
毎日、朝食を食べていますか	55.8 %
将来の夢や目標を持っていますか	60.5 %
自分には良いところがあると思いますか	46.5 %
校内に安心して過ごせる場所がありますか	76.7 %
授業はわかりやすいですか	90.7 %
心和中に転入して良かったですか	97.6 %

年度初めに策定した学校運営に関する計画では、「学校に行くのは楽しいですか」という問いに対して肯定的な回答をする生徒の割合の目標を80%に設定していた。しかし、結果は約65%であり、毎日学校に来ている生徒の中でも楽しいと感じられていない生徒がいることがわかった。不登校を経験した生徒にとって毎日登校することのしんどさは、私たち教職員が想像するよりも厳しいのかもしれない。

一方で、「心和中に転入して良かったですか」という問いに対しては無回答であった生徒を除いて全員が肯定的な回答をしている。これにはオンライン中心で授業に参加する生徒も含まれており、「なぜ良かったか」とさらに問うとそれぞれ違った結果が出ることも考えられるが、97.6%という結果は非常に嬉しいものであった。

### (4) 卒業生の進路状況

令和6年度の卒業生27人のうち26人が高等学校等に進学した。私立の専修学校・専門学校に進学した16人は、そのほとんどが通信制か通信と対面登校を組み合わせた学科を選択している。保護者を交えた三者懇談だけでなく、チューターを中心に日常から進路の話をしなが、結果的には希望や将来像につながるような進路選択が実現し、胸を張って卒業していくことができた。

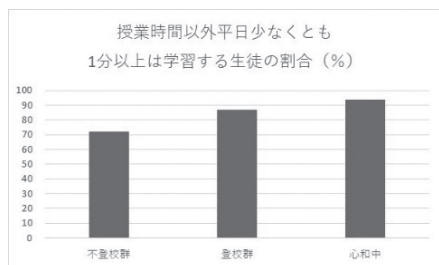
今後は、進路が未定である生徒の追指導を含めて卒業生の追跡調査を実施し、令和6年度の実績、とりわけキャリア教育や進路指導の在り方の検証を図っていく予定である。

		男子	女子	合計
公立	全日制	0	0	0
	定時制	0	1	1
	多部制単位制	0	1	1
	通信制等	0	2	2
私立	全日制	1	5	6
	専修学校・専門学校（通信制含む）	6	10	16
その他	未定	0	1	1
合計		7	20	27

#### (5) 大阪市総合教育センターによる調査・分析より

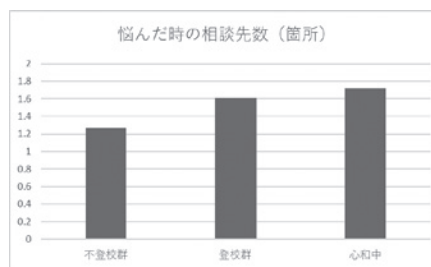
大阪市総合教育センターの調査分析グループがいくつかの観点で、本校の生徒と全市における登校群、不登校群の3グループで比較分析を行った。本校の生徒については、令和6年4月に転入して半年が経過した前期生18人（在籍26人）に対するアンケート結果を用いている。全市の数値は、大阪市が令和5年度に実施した「子どもの生活に関する実態調査」の結果を引用した。登校群は集計対象者20,595世帯のうち保護者・児童生徒ともに回答した世帯で登校状況の問いに欠測のない10,879世帯の結果を、不登校群は保護者向け調査において30日以上欠席していると回答した330世帯の結果を活用したものである。

以下6つの項目をピックアップして報告する。

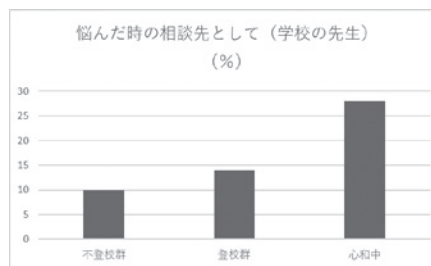


この項目からは、平日に全く勉強をしない生徒

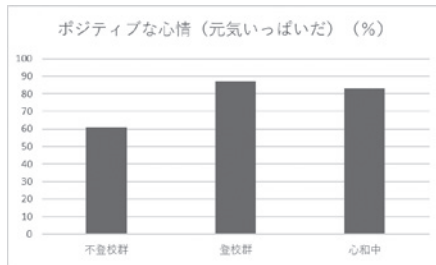
の割合が本校は比較的少ないことがわかる。本校に転入したことにより、学習意欲が高まり、学習時間が増えた可能性がある。



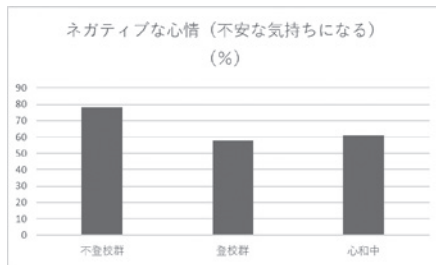
「悩んだ時に相談するところがあるか」という問いに対しては本校の生徒が最も多く、相談先が1.72か所という結果であった。全市よりも高くなっているが、その理由は次のアンケート結果に表れている。



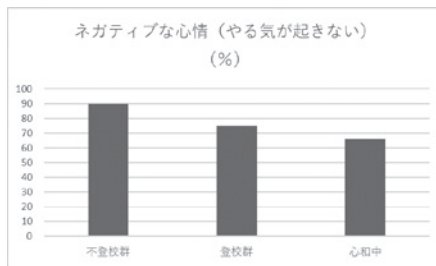
本校の生徒は、相談相手として教員をあげる割合が全市の登校群、不登校群よりもかなり高いことがわかる。本校の生徒にとって、教員はセイフティーネットになっていると考えられる。



ポジティブな心情の質問のうち、「元気いっぱい」と答えた生徒は登校群より少し低いものの、不登校群よりもかなり高くなっており、転入後に元気を取り戻した結果であろう。



逆にネガティブな心情の2つの質問であるが、「不安な気持ちになる」という生徒の割合は不登校群より低く、登校群に近い割合となった。



さらに、もう一つの「やる気が起きない」という質問では、登校群よりも割合が低くなっており、

本校に転入したことにより学校生活をしっかり送ろうという意欲が高まった結果であると思われる。

これらの結果と先述の本校独自アンケートの結果を合わせて考察すると、本校に転入したことにより、学習を含めて学校生活に対して前向きになり、悩みを相談できるようにもなってきている。ありのままを受け止める方針、チューターを中心としてスクールカウンセラーや学年教員団が緊密に連携したきめ細やかな見守りと支援を通して、学習習慣、生活習慣、心情面の安定等多方面において本校の取組の有意性が示されたものと思っている。

しかし、今回の結果の成果だけをみるのではなく、アンケートを提出していない生徒や肯定的な回答ができなかった生徒の個々の状況を捉え、教育を進める必要がある。限界はあるだろうが、本校にとってはどこまでも個に応じた指導の在り方を追求すべきだと考えている。

## (6) hyper-QU の結果より

令和6年度、本校ではhyper-QUを前期と後期2回実施した。そのうち、12月に実施した調査の結果について考察する。

### ① 教師との関係

肯定的な回答をした生徒の割合 (%)

アンケート項目の内容	本 校		全 国
	2 年 生	3 年 生	
学校内に気軽に話ができる先生がいる	70.0	76.2	57.5
学校内に悩みを相談できる先生がいる	60.0	66.7	39.3

大阪市総合教育センターの調査結果でも表れていたが、「気軽に話ができる先生がいる」と答える生徒の割合は全国よりもかなり高くなっている。しかし、「悩みを相談できる先生がいる」という設問になると2、3年生ともに約10%低くなる。すなわち、教員とは気軽に話話ができるが、悩みを相談するところまでは至らないと思う生徒が数人いるということになる。全国と比較すると悩みを相談できる先生がいる割合は高い数字ではあるものの、私たち教職員は不登校であったころの悩みや転入後も解消されない不安を出し切

れていない生徒がいるということを理解しておく必要がある。

## ② 学級との関係

肯定的な回答をした生徒の割合 (%)

アンケート項目の内容	本 校		全 国
	2 年生	3 年生	
行事に参加したり活動したりするのは楽しい	70.0	76.2	78.0
自分もクラスの活動に貢献していると思う	40.0	47.6	52.1

次に学級との関係であるが、「行事を楽しい」と感じている生徒は全国平均より少し低いものの70%以上の生徒が楽しいと感じている。それに比して、クラスに貢献していると思っている生徒の割合は全国との差が広がり、50%を下回っている。集団行動に参加できない生徒もいるが、全体的には取組を繰り返すなかで行事を楽しんでいると思えるようにはなっている。

## ③ 友人との関係

肯定的な回答をした生徒の割合 (%)

アンケート項目の内容	本 校		全 国
	2 年生	3 年生	
友人との付き合いは自分の成長にとって大切	80.0	90.5	85.2
人と仲良くする方法を知っている	45.0	42.9	63.0

このアンケート項目は本校生徒の心情を如実に表している。「友達との付き合いは大切であるが、その方法がわからない」という傾向にある。本校生徒の多くは過去に対人関係におけるトラブルがあり、生徒同士がつながることに慎重になっている。その慎重さの一つの特性であるが、授業における協同的な学びや特別活動・総合的な学習における集団行動など、生徒と生徒の結びつきのきっかけとなるような取組は計画的に進めていきたい。

## ④ 進路意識

肯定的な回答をした生徒の割合 (%)

アンケート項目の内容	本 校		全 国
	2 年生	3 年生	
なりたい職業や興味を持っている職業がある	65.0	61.9	70.0
自分の将来に夢や希望を持っている	45.0	47.6	66.8

この項目も特徴的な結果が出た。本校の生徒は憧れの職業はあるが、それに対して希望を持っていないということである。不登校であった頃に、楽器や絵画などに取り組んだ生徒がいる。また、自分の個性・特性を分析し中学校卒業後の進路を真剣に考えた生徒も多い。しかしその反面、将来への不安が付きまとう。学力の不安、対人関係の不安、朝から起きて登校できるかという不安などである。3年生は夢組であり文字通り夢を持って生きてほしいが、QUにおいて現実はこの数字を突き付けられると、今後の進路指導では夢や進路先を定める前に、しっかりと個々の学方面や生活面を把握し、現実にあった進路に導いていくことが必要になってくると痛感している。

## 5 | 不登校対策に対する「学びの多様化学校」としての役割

### (1) めざすもの

戦後の復興をめざした高度成長期時代からバブルが崩壊するぐらいまでは、大量生産大量消費の産業構造で、学校に対して大量かつ均質な労働力が求められた。しかし、時代が流れ産業構造が変化し、独創性や付加価値・SDGs等が求められるなか、学校教育は如何ほど変化したのだろうか。詰襟やセーラー服はブレザーに変わり、ノートから端末に変わろうとしている。一方、理不尽ともいえるような校則が残っていることや、時代の流れに沿った教育内容になっているとは言えないことも多々ある。「公教育はこうあるべき」という固定観念が強すぎて変化を恐れ、時代や子どもの実態に合っていないものがたくさんあるのではないか。もし私の考え・感覚が正しいのであれば、他校の教職員が不登校を経験した本校の生徒の様子や施設・設備、あるいは教育内容にふれることにより、教育に対する固定観念を廃し、自校の取組や施設・設備を見直すきっかけになるのではないかと考えている。

## (2) 視察等の件数

令和7年9月末現在

	教育委員会	学校園	議員	教育関係組織	その他	合計
市内	21	17	4	34	13	89
市外	48	34	9	25	4	120
合計	69	51	13	59	17	209

上記の表のように、令和6年4月の開校以来、様々な団体・組織から200件を超える視察があった。市外の教育委員会が最も多いが、市内外の学校園も多く視察のため来校している。教育関係組織の中に教職員も多く含まれており、1年半という期間のなかで、おそらく1000人を超える大阪市立校園の教職員が本校を訪れている。

また、市内各地域・組織の研究集会等で校長である私や本校教職員が講演・発表する機会も数多くあり、不登校課題を共に考える機会も大切にしてきた。そのような場では、本校教育を知ってもらっただけでなく、本校の実践に対して様々な示唆をもらえることもあり、本市における不登校対応を考えるうえで、大変有意義な機会になっていると感じている。

### (3) 各学校における視察等の事後対応として

本校を視察した、あるいは私や本校の教職員が出向いて講演・発表してきた学校や組織・団体の事後対応として、次のようなことが進められている。

- ・校内教育支援センターの設置や図書室の改修にかかわってイケアと連携して整備した。
- ・各教室に観葉植物を置くことにした。
- ・リラックスルームのような教室の設置を検討している。
- ・自己表現しにくい児童への配慮・工夫をまねしている。
- ・縦型ホワイトボードを購入し、校内教育支援センターで活用している。

等であり、これらの対応は本校を視察したのち、各学校が取り組んだものである。



## 6 | おわりに

不登校対策に答えや特效薬はない。その学校の状況、児童生徒の実態、担当者の体制など様々な状況のもと各学校や教育委員会が議論し取組を模索している時期だと思う。「児童生徒の要望・声をどこまで許すか」という校内教育支援センター設置校等からよく聞く悩みは本校でも同じである。今後も、不登校対策で悩む教職員や教育関係者と交流する機会を大切に、「誰一人取り残さない教育」をめざして努力を続けていきたい。